

第102号 通巻18巻第6号
1999年2月1日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
電話・FAX 077-585-4397

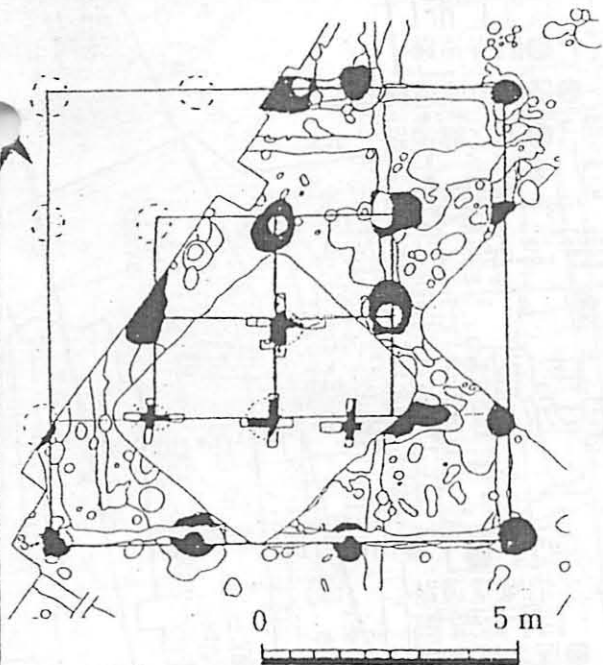
☎524-0212
守山市服部町2250番地

二層構造の建物を発見

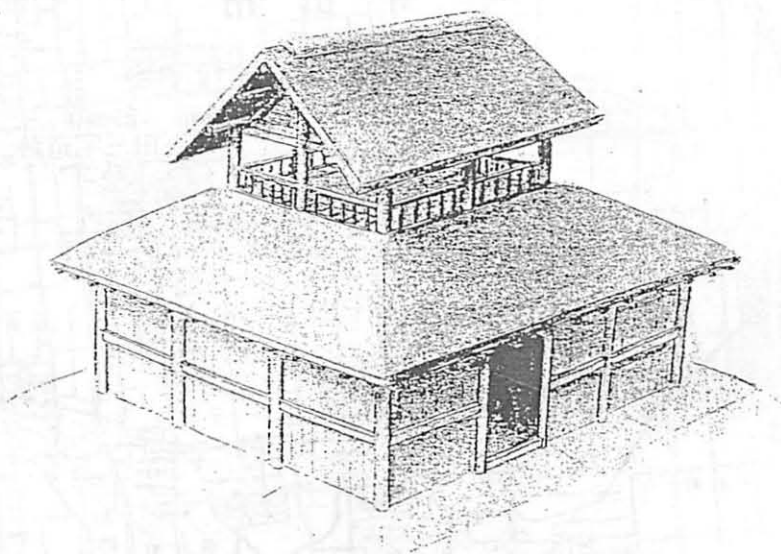
1. 伊勢遺跡52・53次調査（伊勢町・阿村町）

昨年11月から12月にかけて阿村町地先で確認調査を実施しました。この調査は伊勢遺跡の範囲や内容を確認するためのもので、中心区画が見つかった18次・21次調査地の東側約32mの地点にあたります。調査の結果、弥生時代後期の大型掘立柱建物1棟、^{はったてばしらたてもの}竪穴住居7棟、溝3条などを検出しました。大型建物は3間×3間の正方形の建物で、それぞれの壁がほぼ東西南北に向いて建てられていたと考えられます。建物の規模は一辺が約9mで、床面積は約81㎡と推定されます。柱穴は直径約90cm、深さ105cmを測り、柱と柱の間には幅30cm、深さ30cmの溝が掘られていました。この溝の断面を観察したところ、板の痕跡が確認され、柱間に^{いたかべ}板壁があったことが推定されました。さらに内側には2間×2間の^{そうばしら}総柱の柱穴があり、柱の配置や規模（直径約1m、深さ95cm）から二層構造の建物が想定されました。伊勢遺跡の中心部からは柱配置の異なる建物が次々に見つかっていて、機能の異なる大型建物が組み合わされて集落の中心部が構成されていることがわかってきました。

竪穴住居は一辺4～7mの方形住居で、大型建物がなくなった後につくられたと考えられます。年代は弥生時代後期後半と推定されます。このほか、現在の地割り方向に一致する溝（幅1m、深さ70cm）



大型建物遺構平面図



大型建物復元想像図

52次調査地

0 10m

(伴野)

溝

竪穴住居

53次調査地

竪穴住居

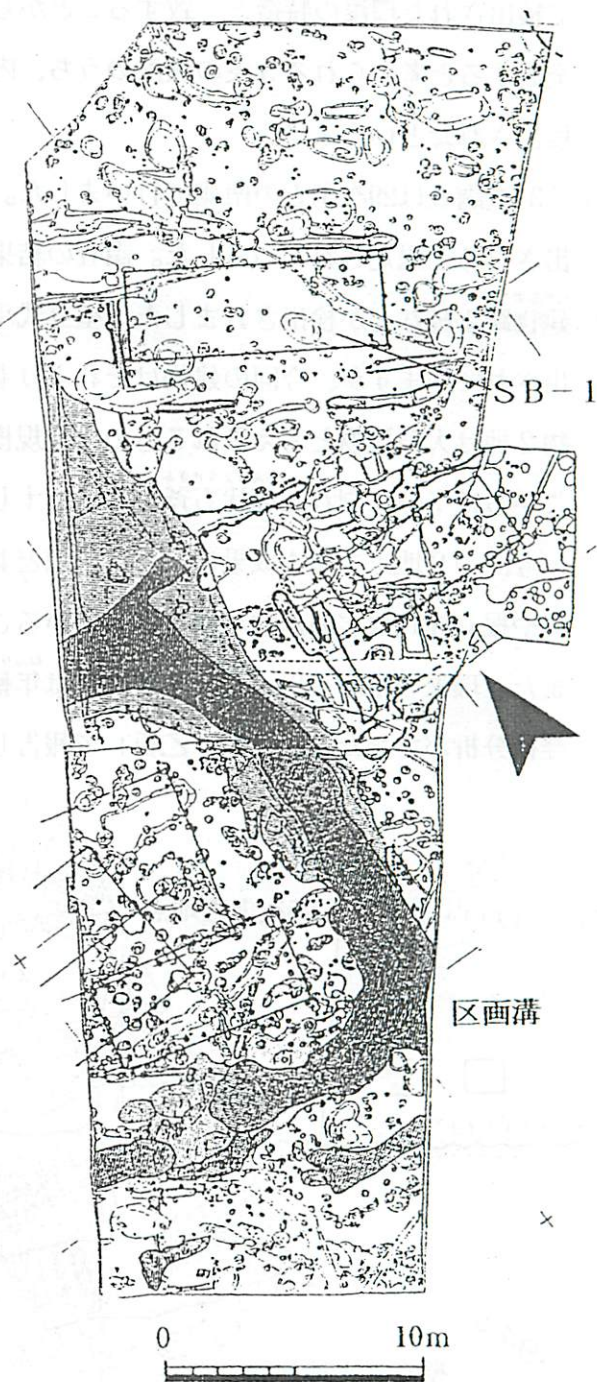


発掘調査位置図

2. 下之郷遺跡27次調査（下之郷町）

都市計画道路建設に先立ち、進めてきた下之郷遺跡^{しものごう}の調査は昨年暮れに終了しました。およそ15ヶ月の長期にわたる発掘調査で、弥生時代^{かんごうしゅうらく}の環濠集落について、たくさんの調査成果を得ることができました。重要な遺跡ですので、できるだけ現地を公開し、数多くの方々に見て頂くために現地説明会やスライド会などを行いました。現地に足を運んで頂いた方には不案内な事もあったかと思いますが、この紙面にてお詫び申し上げます。

さて、前号では集落内部で区画溝が見つかったことを紹介しましたが、その後の調査でさらに続きの溝が検出されました。今回見つかった溝は「コ」の字に^{めぐ}巡らされた区画溝の北辺にあたり、その規模は幅70cm、深さは遺構検出面から1m以上も掘り込まれたものでした。前回の区画溝と今回発見された東西溝の存在から、中央部の区画は南北約20mの範囲を囲むものと想定されるようになりました。現状では西側の区画溝の存在や区画内部の建物の様子など、よくわからない点がありますが、今後の調査によって明らかにできればと思います。また、この北東側の調査では無数の柱穴が見つかりました。おそらく、同じ場所で何度も建て替えられたためと考えられます。中でもSB-1は長辺が約10m、短辺が3.9mの規模で、長辺の柱が不揃いですが、平地式^{へいちしき}の建物ではないかと考えられます。下之郷遺跡では、これまでの調査でも竪穴住居は確認されていませんが、今回発見されたような長方形の平地式建物が住居として使用されていたのかもしれません。



下之郷遺跡遺構平面図

（川畑）

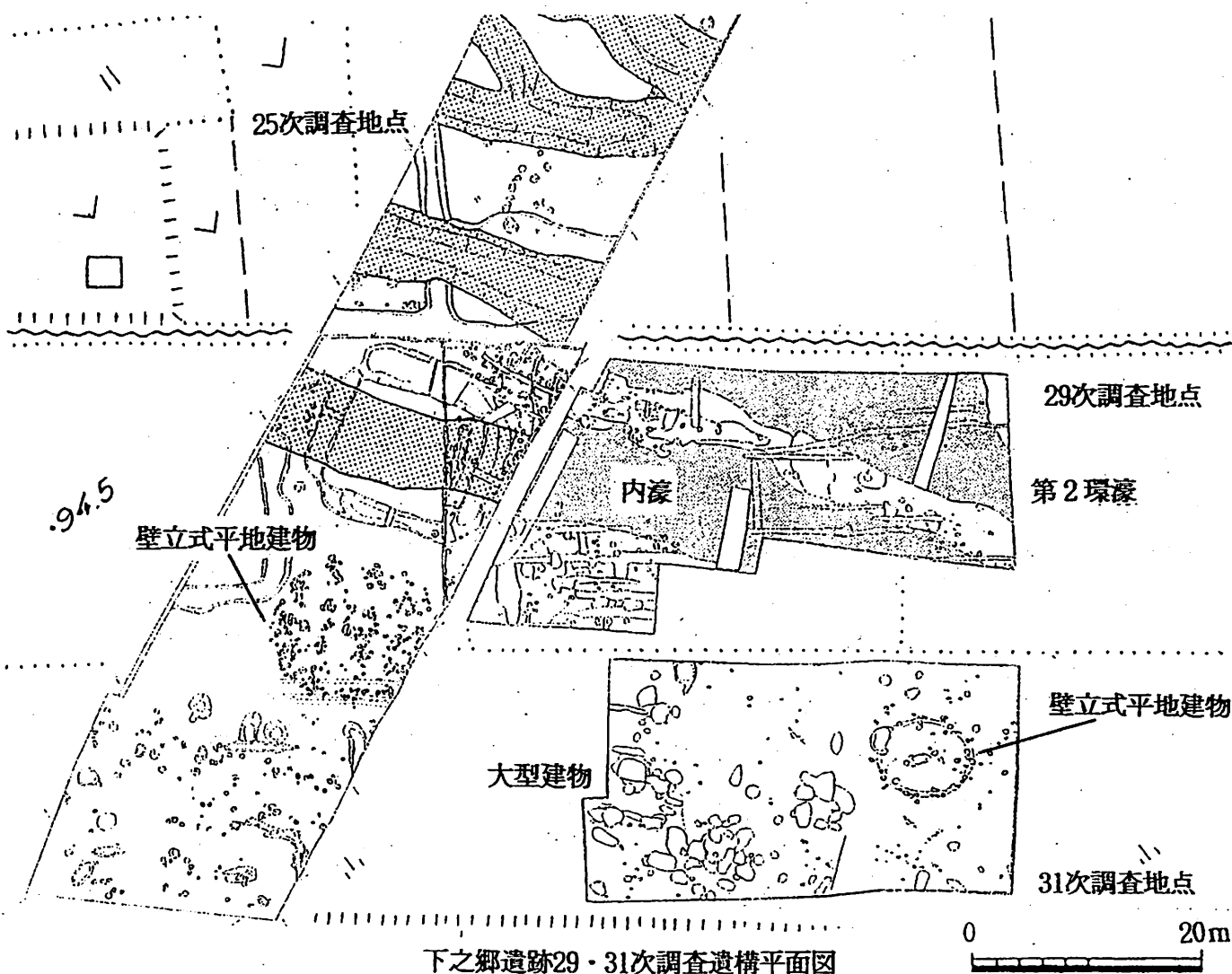
3. 下之郷遺跡29・31次調査（下之郷町）

平成10年11月中旬から12月にかけて下之郷遺跡の北東部の2ヶ所で確認調査を実施しました。まず、29次調査では2条の大きな溝と柱穴などが検出されました。南側の大溝は幅約7m、深さ2mの規模で底から少し浮いた状態で多量の本製品や土器が出土しました。これらの大溝の様子は西側（25次調査）

で検出された環濠の特徴と一致することから、それぞれの環濠の延長と考えられることができ、遺跡を全周すると考えられる3条の環濠のうち、内側と中央の2条の環濠、そしてその内側の居住部分が一部検出されたといえます。

31次調査は29次調査の南側で行いました。この部分は環濠集落の居住部分にあたり、建物跡などが検出されると想定されていました。調査の結果、当初の想定どおり掘立柱式高床建物跡2棟と壁立式平地建物跡1棟などが検出されました。壁立式平地建物は平成10年6月に道路部分の調査（25次調査）で検出されていますが、今回の建物はそれよりもやや小型で、直径約7mの大きさでした。掘立柱式高床建物2棟は大型建物と考えられるもので、規模は2間×1間以上、床面積も50㎡前後と推定されます。ここからは半分に割れた環状石斧が1点出土しています。

今回の2地点の調査成果は、ほぼ予想どおりの位置で環濠が見つかったこと、また居住空間には壁立式や掘立柱式などの建物が配置されていることで、遺跡の北東部分はやや希薄な感じであることです。また、環濠の中から出土した木製品には年輪年代分析が出来そうな保存状態の良いものもありました。今後分析ができれば、この「乙貞」で報告したいと思います。（山崎）



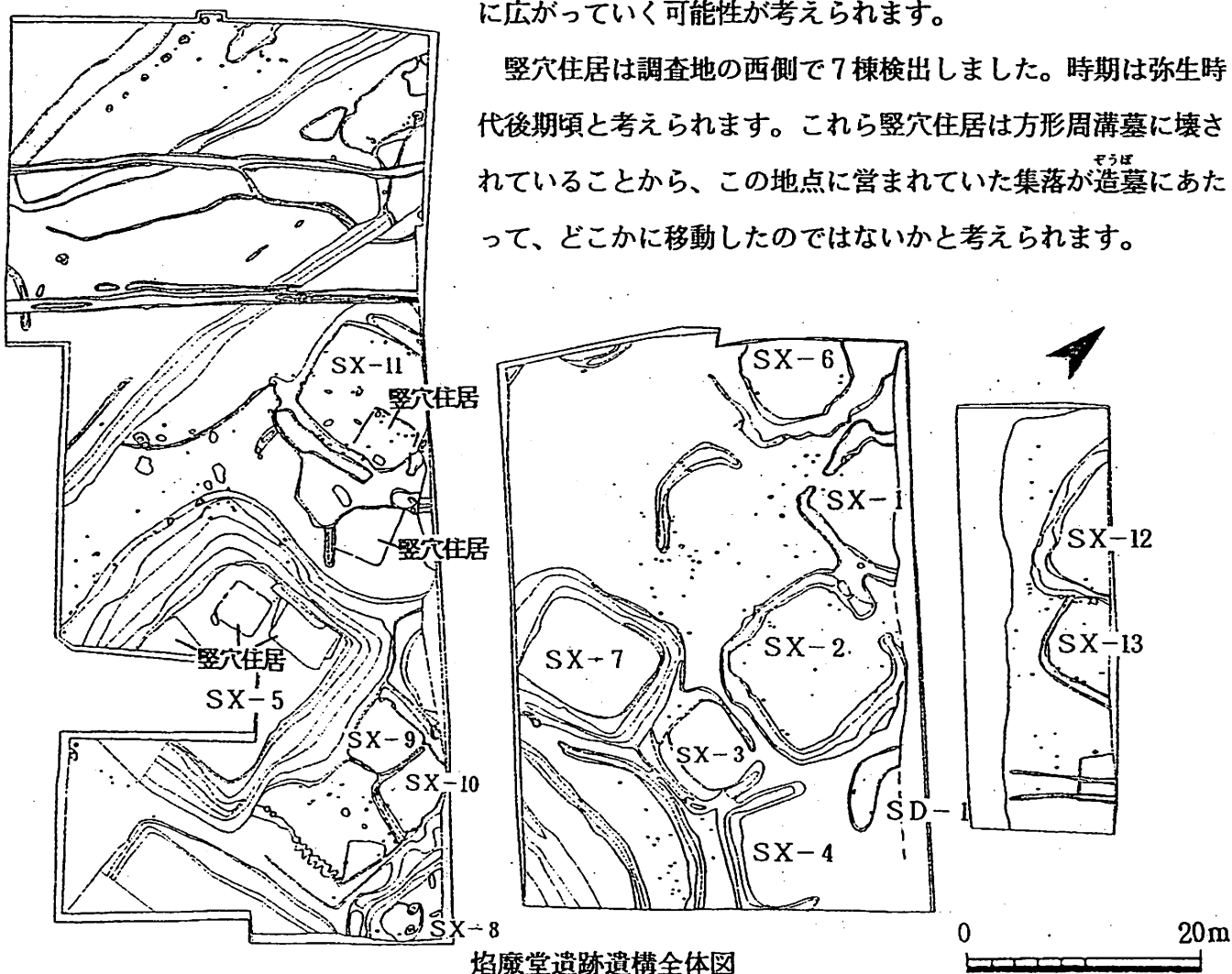
4. 埴魔堂遺跡調査（埴魔堂町）

4月から実施していた埴魔堂遺跡の発掘調査も11月24日で終了しました。今回はその調査成果の概要を簡単にまとめたいと思います。

今回の調査では、^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓、^{えんまどうじゅう}竪穴住居、溝、ピットなどの遺構を検出しました。方形周溝墓は調査区の南東側で13基（SX-1～13）検出しましたが、SD-1など全容のわからないものも含めると、あと数基存在する可能性があります。方形周溝墓はいずれも隣接する周溝墓と溝を共有するのが特徴で規模は周溝を含め、一辺が10m以上のものとそれ以下のものに分かれます。このうちSX-5は周溝を含め一辺が約25mと最大です。時期はいずれも弥生時代後期末頃と考えられます。この他、周溝の一部を^{りっきょうじょう}陸橋状に掘り残したもの（SX-1～4）もあり、古墳時代初頭頃に出現する^{ぜんぽうこうほうがたしゅうこうぼ}前方後方型周溝墓の祖^そ形となるのかもしれませんが、平成9年度に実施された^{えんまどうじゅう}埴魔堂城遺跡の調査（今回の調査地から北西約300mの地点）では、弥生時代中期末とみられる方形周溝墓が検出されています。今回の調査では弥生時代中期末に逆上る周溝墓は見つかっていないことから、時代によって墓を築く場所が異なっていたものと考えられます。弥生時代後期末の方形周溝墓は調査区の南東部にまとまって築かれており、さらに南側に

広がっていく可能性が考えられます。

竪穴住居は調査地の西側で7棟検出しました。時期は弥生時代後期頃と考えられます。これら竪穴住居は方形周溝墓に壊されていることから、この地点に営まれていた集落が^{そうば}造墓にあたって、どこかに移動したのではないかと考えられます。

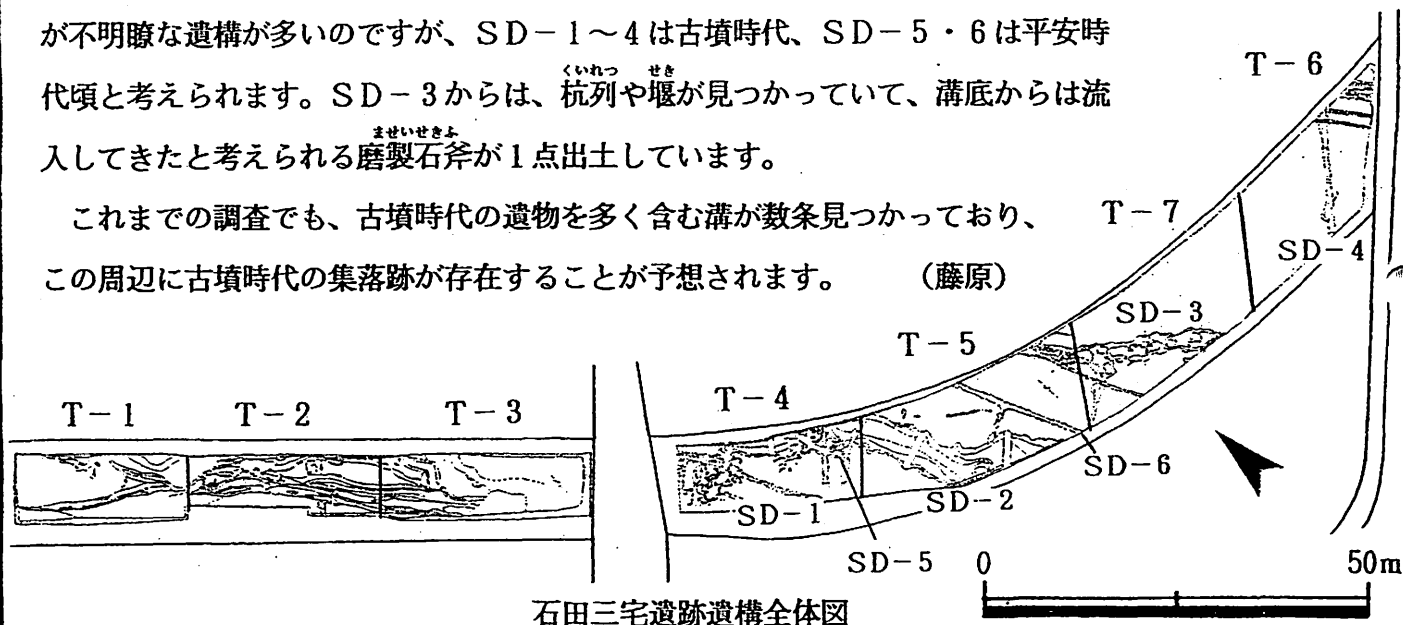


今までこの周辺ではあまり調査が行われていませんでしたが、今回の発掘調査によって、どのような土地利用をされてきたのかなど、地域の歴史を知る上で貴重な資料を得たといえるでしょう。(中村)

5. 石田三宅遺跡の調査(石田町)

道路改良工事に伴う石田三宅遺跡の調査も昨年12月で終了しました。農道の東側の調査(T-4~7)でも古墳時代と平安時代頃の溝・川跡、近世の暗渠跡が見つかりました。出土遺物が少ないため、時期が不明瞭な遺構が多いのですが、SD-1~4は古墳時代、SD-5・6は平安時代頃と考えられます。SD-3からは、杭列や堰が見つかっていて、溝底からは流入してきたと考えられる磨製石斧が1点出土しています。

これまでの調査でも、古墳時代の遺物を多く含む溝が数条見つかっており、この周辺に古墳時代の集落跡が存在することが予想されます。(藤原)



6. 塚之越遺跡14次調査(古高町字正楽)

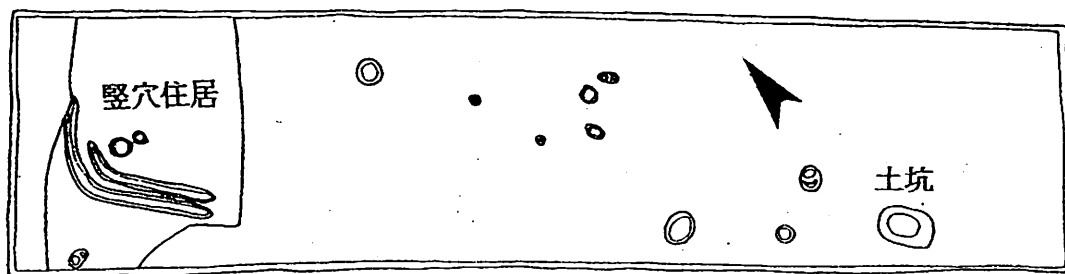
共同住宅建築に伴い確認調査を実施しました。今回の調査地は平成9年度に行われた13次調査(乙貞第97号参照)地点の北東側に位置し、古墳時代前期の旧河道の検出が予想されました。調査の結果、旧河道の肩部と思われるラインを検出したものの、河道の規模や時期を確認することはできませんでした。なお、旧河道の基本層序を確認するために入れたトレンチから碧玉製の管玉が出土しました。管玉はとても丁寧につくられており、両側から孔が穿かれています。



(小出) 管玉実測図(S=1/1)

7. 酒寺遺跡48次調査(播磨田町)

共同住宅建築に伴い、発掘調査を実施しました。土坑やピットの他に、一段低い場所から溝2条と柱穴が見つかり、これらが竪穴住居であることが確認できました。しかし残存状態が悪く、約半分が砂利層で切られていました。溝は竪穴住居の周壁溝と考えられます。住居の年代は出土した土器が細片ばかりであったため、明確ではありません。なお、土坑からは須恵器が多く出土しており、古墳時代後期の時期が考えられます。(大岡)



酒寺遺跡遺構平面図

0 20m

8. 播磨田城遺跡1次調査(播磨田町)

昨年12月から播磨田町字廣畑、下廣畑において、宅地造成工事に伴う発掘調査を開始しました。今回の調査地の北東側には「古城」の字名が残る土地があり、滋賀県が実施した中世城郭分布調査によって一帯を播磨田城遺跡として周知しています。

開発面積約 8,100㎡のうち、今年度は約 2,000㎡を対象に調査を進めています。これまでに砂質土層や礫層をベースに、土坑やピット、縦横に走る溝など多数の遺構を検出しています。遺物は土師器皿や黒色土器碗、瀬戸系のおろし皿、信楽焼きの甕、白磁碗などが出土していることから、13世紀から15世紀前後の時期と考えられます。調査は平成12年3月までの期間を予定しており、随時「乙貞」で報告したいと思います。(畑本)

9. 山田町遺跡1次調査(勝部町)

民間の宅地造成工事に伴い、実施してきた調査も1月末で終了しました。この間、弥生時代中期末頃(約 2,000年前)とみられる竪穴住居、井戸、土坑、大溝などの遺構と大量の土器が出土し、この遺跡が調査開始当初は予想もしなかった弥生時代中期の集落遺跡であることがわかりました。以下、その調査成果を簡単に振り返って見ましょう。

竪穴住居は円形のものと同方形のものが見つかりました。円形住居は一番南側の大溝の南東から2棟見つかりました。うち1棟は直径約9mと大型で、床の深さも検出面から70cmと残存状態は良好なものでした。方形住居は一辺が5m前後のものと3m前後の小型のものがあります。小型の住居からは明確な主柱穴は確認できませんでした。あるいは、住居の上屋構造に違いがあるのかもしれませんが。

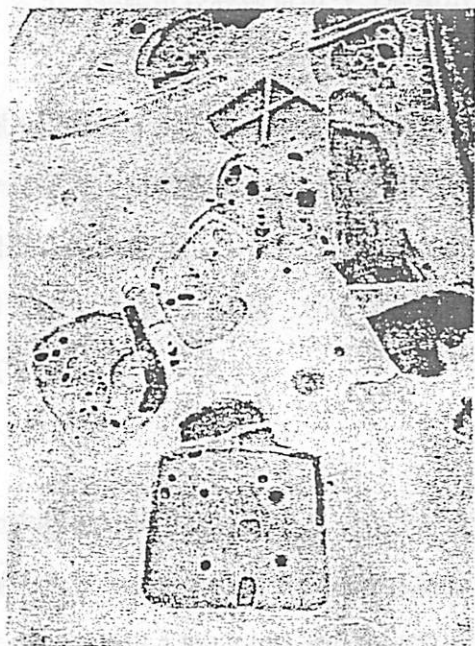
井戸とみられる遺構は4基見つかりました。そのうち、調査地のほぼ中央で見つかったものは掘方の直径約5m、深さ約3mもあります。素掘りであるのか、井戸枠が設置されていたのかは現状では不明ですが、壁際にはおもしろい工夫が施されていました。それは壁際に20～30cm間隔で杭を打ち込み、葦藁のようなものを束ねて編み込んだもので、他にあまり類例がありません。土の崩落止めなどの目的があるのかもしれませんが。

大溝は3条検出しました。北側の2条が円弧状に湾曲しているのに対して、南側の溝は幅4～5m、

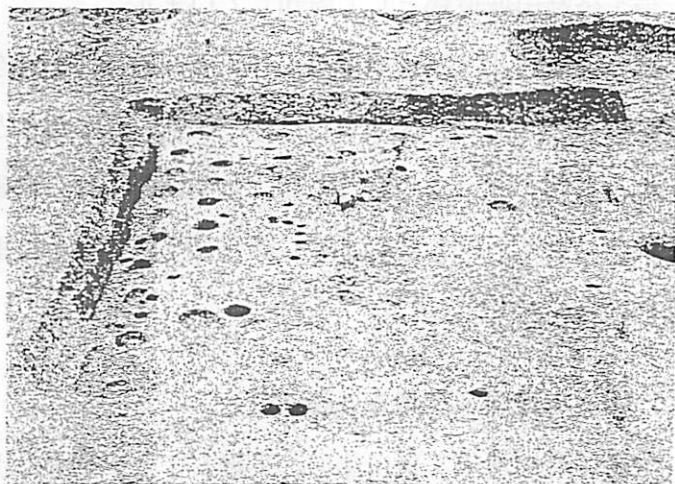
検出面からの深さ 1.5m～2 mと規模も大きく、ゆるやかに湾曲しながら東西方向に延びています。調査当初はこの大溝が集落の内と外を分ける溝であると考えましたが、その後、溝の外側からも竪穴住居などが見つかったことから、集落は溝よりさらに南側にも広がることが確認されました。ただ、大溝と住居や井戸など、その他の遺構が重複しているものもあり、すべてが同時に存在したものではありません。「集落内を区画する」、「集落の内外を分ける」など、その他の用途も含めて、大溝の性格を検討していきたいと思います。

この地域の弥生時代中期～後期の拠点集落は下之郷遺跡→二ノ畦・横枕遺跡→伊勢遺跡の変遷が考えられています。特に伊勢遺跡の周辺では、小銅鐸が出土して話題になった栗東町下鈎遺跡やこの山田町遺跡など、伊勢遺跡が出現する直前の時期の集落調査が相次いでいます。今回の調査は伊勢遺跡の成立を考えるうえでもたいへん興味深く、この地域の歴史を解明する重要な資料を得たものと考えられます。

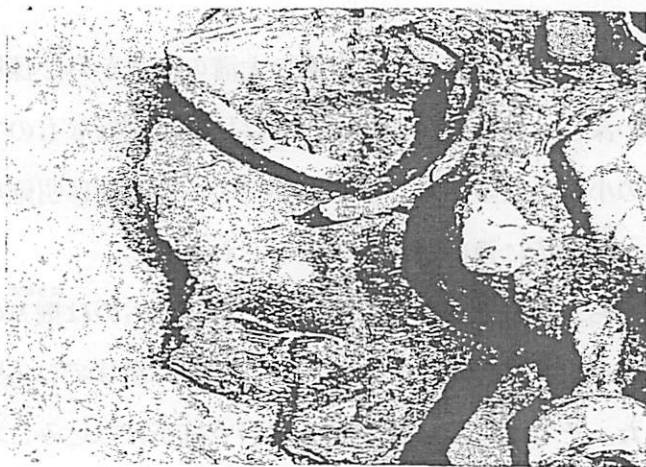
(小島)



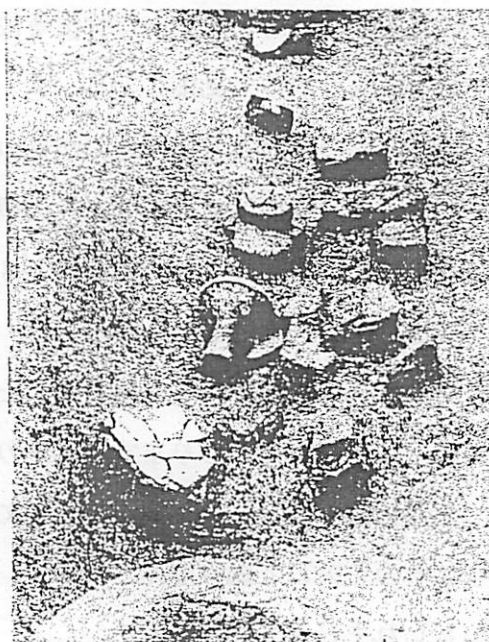
大溝と竪穴住居群



方形竪穴住居



弥生土器出土状況



弥生土器出土状況